

## 授業研究を「核」とする学校づくりに関する研究 —島小の学校公開研究会を中心に—

Overall Research on the Creative School Management Movement Centered on Teaching-Related Research; Focusing on the Study Group Open to the Public at Shima-Elementary School by SAITO Kihaku

狩野 浩二

KARINO Kouji

### 要旨

斎藤喜博が41歳にして校長となった公立学校、島小学校（群馬県）は、1952年から11年間にわたって、斎藤喜博校長の下で、特異な教育実践を展開した。その実践の特徴は、児童の姿を公開するというところにあった。斎藤は、なぜ、児童の姿を公開したのか。それは、授業のなかで、教材の価値や内容ではなく、子どもと教師との対話を重視したことが直接的な理由であり、その対話そのものを磨き上げ、質の高い内容にしていくことが子どもの学力を形成するという信念である。実際、斎藤が校長を務めた島小を原点とする学校づくり運動では、この原則に従って学校づくりを展開した結果、子どもの学力を向上させている。本稿では、そうした学校づくりの原点となる島小において、子どもの姿を公開するということを目的に行われた学校公開研究会に光をあてる。全8回に及ぶこの行事を通して、島小で目指された学校づくりの内実に迫るものである。

### 1. 斎藤喜博による学校づくりの展開

#### 1) 島小の学校づくりと公開研究会

“授業づくりを「核」とする学校づくり”とは、斎藤喜博（以下、斎藤と略記）が群馬県島小学校（以下「島小」と略記する）において行った公立学校における学校づくりに由来する。斎藤は41歳

にして島小の校長となった。その後11年間にわたり同校の校長を務めた。校長として小学校における教育実践の創造という課題に取り組む。その後、斎藤自身としては境東小の校長として1年間、さらに境小校長として5年間にわたり学校づくりに取り組む。退職後は各地の学校づくりに関しての指導を展開する。1981年に亡くなった後は

関係者がその仕事を受け継いだ。その展開は今日にまで続いている。本稿が対象とする学校づくりは、斎藤自身が行った仕事をさす。1952（昭和27）年から11年間にわたる学校づくりである。いわゆる「島小教育」である。

斎藤による学校づくりは、授業を基盤としている。その成果を公表する機会が学校公開研究会（以下「公開研」と表記する）である。島小における公開研は斎藤が島小校長となり4年目となる1955（昭和30）年に第1回目が行われた。その後、毎年定期的に取り組みされる。島小では斎藤が同校校長から異動する前年の第8回（1962、昭和37年度）まで合計8回開催されている。そのうち第6回（1960、昭和35年度）から第8回（1962、昭和37年度）までは小公開研として3回の公開研を追加した。年度末に群馬県内の参観希望者向けに公開研を追加実施している。理由としては島小を参観する者の数が増えたということである。次第に増加する参観者の数に対応するために年に2回の公開研を島小では実施する。

ただし小公開研ではすべての教師が取り組む一般授業として研究授業が取り組まれた。通常公開研では、一般授業と研究授業とが区別されていた。それに対して唯一の例外として最後の年となった1962（昭和37）年度の小公開研は“研究授業”とされた。これは研究授業と標記されているが、しかし全学級で授業が行われた。そのことから考えれば、一般授業として授業を公開する必要がなくなったのか、あるいはすべての授業が公開研の研究授業として実施するだけの内容をもつようになったのかのいずれかであると考えられる。

## 2) 公開研の目的

学校づくりは先述の通り島小を起点として継続することになる。島小以降の学校づくり運動においても公開研を実施することをひとつの目標とするようになる。斎藤を起点とする学校づくり運動は学校を公開するということに大きな特徴がある。公開研は、児童の姿を公開する。公開研にお

いて児童の姿の上に美を実現することが学校づくり運動の目的のひとつである\*<sup>1</sup>。

斎藤の学校づくりは、授業研究を「核」とした。その授業研究においては教科用図書の内容や価値よりもむしろ、教師と子どもとの対話そのものに価値をおいた\*<sup>2</sup>。その方針の下で、島小の授業は、教師と子どもとの対話の質を実際の授業のなかで検討した。

斎藤は授業の価値を“教師と子どもが対話すること”そのものにおいた。その対話をいかに磨き上げていくかが授業の質を高める。したがって授業研究では実際的に授業を“みる”ことが大事にされた。授業の最中に授業を“みる”ことが授業そのものを検討することになる。教材に関する研究はその授業において子どもと教師との対話をより豊かに、より深くするという目的の下で行われる。

一般的には、授業研究は‘事前の教材研究’や‘事後の授業研究’などをさす場合が多い。斎藤の場合の独自性はそれらの価値を認めつつ授業中に行う研究を重視したことにある。リアルタイムに展開する授業において最善の一手を打ち出すということに斎藤はもっとも価値をおいた。それが後に“親方の一時力”とか、“横口授業”、“介入授業”と呼ばれる独特の概念を生み出した\*<sup>3</sup>。

## 3) 公開研の記録

島小における公開研については、同校の教師であった金子緯一郎が編集した『島小11年史』\*<sup>4</sup>に詳しい。その元は島小において印刷製本され、参観者向けに手渡された謄写版刷り公開研資料である\*<sup>5</sup>。この公開研の資料は、後に教授学研究会によって収集された。その後大空社から公刊された『島小研究報告』第7巻、1996年（影印本）に所収される。しかし、著作権者の都合により斎藤と赤坂里子の執筆部分が伏せられた。また小公開研については未公刊のままである。本稿では教授学研究会の事務局を担っていた松本陽一（故人）が収集し保存していた資料群を適宜参照しつ

つ検討する。なお第1回公開研は群馬県教職員組合発行による教育雑誌『文化運動』誌にその概要が掲載された。この研究会においては島小の教員が全員で授業に取り組んだ。特定の研究授業としてではなく、一般授業として取り組まれた。そのため今回の検討は第2回目公開研からを対象とする。

#### 4) 研究授業と一般授業

島小においては公開研において2種類の授業が行われた。そのひとつは一般授業である。一般授業は、全教員で取り組むものである。学級を受け持つ島小の教員が全員で取り組む。島小の本校と分校の全学級で一般授業が実施された。第1回(1955年)公開研がこれにあたる。

もう一つは研究授業である。選ばれた教師たちが行った。かつて斎藤校長の下で島小に勤務した川嶋(旧姓児島)環はこの点について公開研に先立つ夏の合宿研究会のあとで授業者を決めたと話す\*<sup>6</sup>。おおよそ公開研の2ヶ月くらい前までには教職員の話し合いで公開研における研究授業者を決めていた。第2回(1956年)公開研からこの“一般”と“研究”の2種類の授業が公開研において取り組まれた。

公開研では合計51回の研究授業が行われた。平均で各研究会ごとに6回の研究授業が行われている。特徴は第2回において本校のみの3名の教師によって研究授業が行われたことである。第3回からは本校と分校でそれぞれ研究授業が行われている。

本校と分校の授業は先述の通り1956(昭和31)年(第2回)が本校のみで行われた。本校と分校の研究授業の回数は、1959(昭和34)年(第5回)と1961(昭和36)年(第7回)に変化がある。第5回では本校が2授業、分校が4授業、第7回では本校が4授業に対して分校が3授業である。これ以外はすべて同じ数の研究授業が本校と分校とで行われている。ちなみに第3回小公開[1963(昭和38)年1月]は本校が6授業に対して分校が

5授業であるが、これは分校の3・4年生が複式学級となったからである。

本校と分校の研究授業を授業提供数から見れば、特段研究授業を行う学級数(教師数)を定めていなかったということが分かる。こうしたところにも島小の実質主義的な実践のあり方が示されているといっただろう\*<sup>7</sup>。

## 2. 公開研の実際と教師、学級

### 1) 公開研と研究授業者、公開学級の関係

児童の入学年度別に見た場合、もっとも公開研の研究授業数が多いのは1956年本校入学と翌57年分校入学の学級である。何れも5回(5年間)である。たまたま公開研が始まった時に入学したから研究授業を経験する可能性が高かったということもいえる。しかし、同じ年度に入学した児童でも研究授業を経験した学級とそうでない学級とがある。本校56年度入学生は次のような6年間となった。氏名のあとの○印は公開研の授業を行ったという意味である。

#### 【本校1956(昭和31)年度入学生】

本校1年、武田常夫、○。本校2年、滝沢友次、○。本校3年、滝沢友次。本校4年、金井栄子、○。本校5年、金井栄子、○。本校6年、滝沢友次、○。

56年度入学生が1年の時には武田常夫が受け持っている。武田は公開研において最も多い回数(8回)の研究授業を行った(8回)教師である。2年から3年にかけて滝沢友次が持ち上がりで担当する。研究授業は2年の時だけある。その後金井栄子が受け持つ。金井は、武田に次いで研究授業を多くこなした(7回)教師である。そして最終学年で再び滝沢が持つ。ここで研究授業を経験する。滝沢は久保田(旧姓杉本)和子とならんで研究授業回数4回である。島小では7番目の回数である。しかし、滝沢は58(昭和33)年に人事異動で島小に赴任してきた。島小に赴任した教師としては、遅い時期(斎藤の学校づくりからみれば7

年目である)に異動したひとりである。年齢は28歳で武田より1歳若い。島小においては、全体として若手教員が多かったものの、中でも若手の部類である。5年間の島小在職中4回(4年間)にわたり研究授業を経験している。滝沢は、島小で研究に値する授業を提供できた若手教師のひとりであった。

もう1学級の5回の研究授業を経験した分校57年度入学生は次のように6年間を持ち上がりで赤坂里子に受け持たれた学級である。氏名のあとの○印は研究授業者をさす。

【分校1957(昭和32)年度入学生】

分校1年、赤坂里子、○。分校2年、赤坂里子。分校3年、赤坂里子、○。分校4年、赤坂里子、○。分校5年、赤坂里子、○。分校6年、赤坂里子、○。

この6年間のなかで2年生の時だけ研究授業を経験することがなかった。ちなみにこの学級が2年生だった年(1958年度、第4回)は分校は次のような学級(学年編成)だった。島小の場合には単式学級編成であり、学年=学級と考えてよい。氏名のあとの○印は研究授業者であることを示す。

分校1年、久保田(旧姓杉本)和子、○。分校2年、赤坂里子。分校3年、大沢清剛。分校4年、武田常夫、○。分校5年、岡芹忍。分校6年、船戸咲子、○。

これをみる限りにおいて分校の中で久保田(旧姓杉本)、武田、船戸が研究授業者となっている。3名とも国語の研究授業を行っている。詳細は不明ではあるが、たまたま赤坂ではなく久保田(旧姓杉本)や武田、船戸が研究授業者であったということではない。やはり研究に値する授業であるという視点でこの3名が選ばれたと考えられる。結果として赤坂の6年間の持ち上がり学級のなかで唯一2年生の時だけ研究授業の機会を欠いた—研究に値する授業が提供できなかつた—とみる方がよい\*<sup>8</sup>。ちなみに赤坂里子『島小で芽を吹く子ども』(明治図書、1967年)に登場する児童が上記の57年入学生である。

続いて、本校54年入学児童は、次の通りである。

【本校1954(昭和29)年度入学生】

本校1年、加藤とみ子。本校2年 栗田梅乃。本校3年、金井栄子、○。本校4年、金井栄子、○。本校5年、井上光正。本校6年、滝沢友次、○。

3年から4年にかけての金井の持ち上がりで最終学年の滝沢担任の3回が公開研究授業学級となっている。金井、滝沢についてはすでにふれたように研究に値する授業を常に提供しつづけた教師である。

続いて、分校55(昭和30)年入学である。

【分校1955(昭和30)年度入学生】

分校1年、田島富佐子。分校2年、赤坂里子。分校3年、武田常夫、○。分校4年、武田常夫、○。分校5年、岡芹忍。分校6年、武田常夫、○。

3年から4年にかけて武田による持ち上がりに加えて最終学年で再び武田が受け持ち、研究授業を行っている。この点は武田に対する学校全体の期待ということを読みとることができる。

次は、分校56(昭和31)年入学である。

【分校1956(昭和31)年度入学生】

分校1年、田島富佐子。分校2年、大沢清剛。分校3年、大沢清剛。分校4年、船戸咲子○。分校5年、船戸咲子、○。分校6年、武田常夫、○。

4年生から5年生にかけて船戸が持ち上がりで受け持ち、最終学年を武田が持つ。3回の研究授業を経験した児童である。

次は、同じく分校の58(昭和33)年入学である。

【分校1958(昭和33)年度入学生】

分校1年、久保田(旧姓杉本)和子、○。分校2年、大沢清剛。分校3年、大沢清剛。分校4年、船戸咲子、○。分校5年、武田常夫、○。

この学級は5年生の時に島小公開の最終回(第8回)を経験している。そのため5年生までの記録である。新入学時には久保田(旧姓杉本)により授業研究が行われ、4年次に船戸咲子、5年次に武田常夫が受け持ち、研究授業を行っている。

次は、本校59(昭和34)年入学の学級である。

【本校1959(昭和34)年度入学生】



本校1年、金子緯一郎。本校2年、金子緯一郎、○。本校3年、金子緯一郎、○。本校4年、金子緯一郎、○。

この年度の入学生は4年生の時に島小公開の最終回となった第8回を経験した。1年生の時から金子緯一郎が持ち上がりで受け持つ。2年から4年の3回にわたり研究授業を経験する。ちなみにこの学級が1年生だったとき（金子が研究授業を行わなかった時）の本校の研究授業者は以下の通りである。

本校1年、金子緯一郎。本校2年、井上光正。本校3年、川嶋（旧姓児島）環。本校4年、金井栄子、○。本校5年、青山重大。本校6年、滝沢友次、○。

研究授業は4年の金井と6年の滝沢である。この年は本校からはこの2学級だけが研究授業を提供する。この2学級がこの年の本校の実態として研究に値する授業を提供できるだけの力を備えていたとみることができる。

最後は、本校60(昭和35)年入学の児童である。

【本校1960（昭和35）年度入学生】

本校1年、川嶋環、○。本校2年、川嶋・竹内悦子、○。本校3年、川嶋環、○。

この学級は3年生で最終の公開（第8回）を迎えた。1年生の時から川嶋（旧姓児島）環が受け持つ。3年生までの3回にわたり研究授業を経験する。2年次には産休により一時休職（竹内は、代替の教員である）する。公開研には研究授業者として川嶋が参加している。

ちなみに、本校と分校とで公開研の授業者（学級）数が異なる年度の状況は、次の通りである。本校が3学級、分校が4学級の第7回公開（後者）の授業者である。

船戸咲子、分校4年、国語、うた時計。赤坂里子、分校5年、国語、やかれたさかな。武田常夫、分校6年、国語、大きなしらかば。川嶋（旧姓児島）環、本校2年、理科、あま水。金子緯一郎、本校3年、国語、耳のちりょう。金井栄子、本校5年、算数、平行四辺形の面積。滝沢友次、

本校6年、国語、ペニシリンを作り上げた人々。

分校が3名、本校が4名と他の年度とは異なる公開研授業者（学級）数である。分校の船戸、赤坂、武田は何れも研究授業の回数やその他の教育実践を通してでも選ばれるべくして選ばれた。本校においても川嶋（旧姓児島）、金子、金井、滝沢である。それぞれ先述の通り島小を代表する教師たちである。この年度において分校と本校とで例年とは異なる数の学級が研究授業を行った。このことは先述の通り、島小が実質（研究）を大事にしていたことの証左であるといっていよう。

## 2) 研究授業者の選出

島小においては各年度ごとの学級担任をはじめ、校務分掌に関して教職員の話し合いによって担当者を決めていた\*<sup>9</sup>。公開研の授業者についても同様に話し合いによっていた。各年度ごとの研究授業者を見ても形式的に発表者数を決めていたということではない。その年度ごとに検討に値する授業を提供できる学級が選ばれていた\*<sup>10</sup>。

公開研は2日間にわたって行われた。本校と分校とで開催日を分け、先述の通り一般授業と呼ばれた全教員で行う授業に続いて研究授業が行われている。資料によると第1回（1955年）公開研は全教員で研究授業が行われた。学校独自の要項は未発見、未発掘である。おそらく作成されなかったと思われる。そのかわりに先述の通り群馬県教職員組合発行の『文化労働』誌（1956年2月号）に島小特集が組まれた\*<sup>11</sup>。

## 3) 公開研における教師と授業研究への取り組み

次は、島小教員別の研究授業回数である。

順位1、武田常夫、8回。順位2、金井栄子、7回。順位3、赤坂里子、6回。順位3、船戸咲子、6回。順位5、金子緯一郎、5回。順位5、川嶋（旧姓児島）環、5回。順位7、久保田（旧姓杉本）和子、4回。順位7、滝沢友次、4回。順位9、海東照子、2回。順位10、大沢清剛、1

回。順位10、岡芹忍、1回。順位10、小保方晃子、1回。

もっとも回数が多いのは武田常夫（8回）である。武田は斎藤の学校づくりにおいて3年目から25歳で参加した。最終年度まで継続的に同校の仕事に携わった。

2番目に多いのが金井栄子である。金井は斎藤赴任時から同校に在職し、大沢清剛、船戸咲子に続き、島小の11年間をずっと見続けた教師である。

続いて赤坂里子と船戸咲子がならぶ。赤坂は金子緯一郎、武田とともに23歳で島小に赴任した。第8回の最後の公開研まで勤務した教師の一人である。ひとつの典型となる学級づくりを展開する。船戸は先述の通り25歳で斎藤校長と出会う。その後一貫して11年間にわたり島小の教師として活躍する。赤坂同様“典型学級”を創る。“××ちゃん式間違い”や“想像説明”などの教育技術を創出した教師である。

川嶋（旧姓児島）環は1957年度に初任者として島小に着任した教師である。着任後翌年度から連続して公開研の研究授業者となっている。

#### 4) 研究授業と教科目

次は、取り上げられた教材の教科目とその回数である。

順位1、国語、37回、73%。順位2、算数、7回、14%。順位3、理科、5回、10%。順位4、社会、2回、4%。合計、4教科目（国語、算数、理科、社会）、51回。

教科目別では国語が最も多い。全体の73%（37回）を占める。島小においては音楽、体育、国語が重視された。それを傍証する事実である。ちなみに音楽や体育は研究授業において取り上げられることはなかったが、しかし、公開研においては合唱や行進、オペレッタ、舞踊などが児童によって披露された。これらが音楽や体育などの教科目の学習成果として公開された<sup>\*12</sup>。

2番目に多いのが算数である。14%（7回）である。島小以降の学校づくり運動においても算数

の授業研究が盛んに行われた。島小においては先述の船戸咲子の「××ちゃん式間違い」や「想像説明」などは算数の授業の中から生じたものであった。

続いて理科である。全体の1割（5回）に過ぎないが、無視できない数である。理科はすべて川嶋（旧姓児島）環によって行われた。川嶋（旧姓児島）は群馬大学学芸学部の理科専攻であった。理科教育の研究者であった高橋金三郎とも深い交流があった。川嶋（旧姓児島）は島小以降の学校づくり運動においても精力的に理科の授業研究を続けている。

最後が社会である。全体の4%（2回）であり、非常に少ない数ではあるが、『島小の授業：教材研究・授業案づくり・展開・の記録』（斎藤編、1962年、麥書房）など、島小の文献には社会の授業がしばしば登場する<sup>\*13</sup>。公開研の社会は海東照子によって取り組まれた。第2回（1956年）と第3回（1957年）に研究授業として取り組まれている。海東は「どどめ（桑の実）ジャムづくり」や「針を持たない家庭科教師」などの実践記録を書いた。公開研では、社会の研究授業を唯一行っていた<sup>\*14</sup>。

#### 5) 国語教材

次は研究授業において取り上げられた国語教材について2回以上取り上げられたものを列挙したものである。教材名のあとの○印は教科用図書以外の教材（島小の文学教材として島小において発掘、開発された教材）、×は教科用図書に掲載された教材である。

- 1、ペニシリンを作り上げた人々、×。1959（昭和34）年12月、第5回、武田常夫、分校6年、国語。1960（昭和35）年12月、第6回、武田常夫、分校6年、国語。1961（昭和36）年12月、第7回、滝沢友次、本校6年、国語。
- 2、レオナルドの最後の晩餐、×。1958（昭和33）年12月、第4回、金子緯一郎、本校6

- 年、国語。1958(昭和33)年12月、第4回、船戸咲子、分校6年、国語。
- 3, 山の向こう、×。1956(昭和31)年11月、第2回、金井栄子、本校3年、国語。1959(昭和34)年12月、第5回、赤坂里子、分校3年、国語。
  - 4, 天下一の馬、×。1960(昭和35)年12月、第6回、赤坂里子、分校4年、国語。1962(昭和37)年12月、第8回、金子緯一郎、本校4年、国語。
  - 5, 鉄の馬、×。1957(昭和32)年12月、第3回、金井栄子、本校4年、国語。1958(昭和33)年12月、第4回、武田常夫、分校4年、国語。
  - 6, すずのへいたい、○。1962(昭和37)年12月、第8回、杉本(久保田)和子、分校1年、国語。1963(昭和38)年1月、第3回小、大沢清剛、分校2年、国語。
  - 7, 黒いピロート服の女性、○。1962(昭和37)年12月、第8回、赤坂里子、分校6年、国語。1963(昭和38)年1月、第3回小、赤坂里子、分校6年、国語。
  - 8, おしになった娘、○。1962(昭和37)年12月、第8回、武田常夫、分校5年、国語。1963(昭和38)年1月、第3回小、船戸咲子、本校5年、国語。
  - 9, 塩田の父、×。1957(昭和32)年12月、第3回、船戸咲子、分校5年、国語。1960(昭和35)年12月、第6回、船戸咲子、分校5年、国語。
  - 10, えにかいたとら、×。1958(昭和33)年12月、第4回、久保田(旧姓杉本)和子、分校1年、国語。1959(昭和34)年12月、第5回、久保田(旧姓杉本)和子、分校1年、国語。

同一教材で行われた研究授業は以上の10教材である。教科用図書以外の教材が用いられたのは、6～8の3教材である。これらは後述する島小の文学教材としてリストアップされた。この一覧の

限りで言えば、島小では文学教材の発掘や開発が熱心に行われたという印象があるものの、実際にはきわめて忠実に教科用図書を使用していたことが分かる。後述するように教科用図書以外の教材が使用されるのは第7回(1961年)からである。第1回(1955年)から5回(1960年)まではすべて教科用図書の教材が用いられた。なお教材名のあとの○は島小において作成された「島小の文学教材」リストに掲載があり、それらは当時においていわゆる“教科書教材”ではなかった。島小における公開研では島小の学校づくりにおいて開発されたり、発掘された教材が予想以上に使われていない。公開研全体(第2回から第8回)で見ると次のようになる。

1956(昭和31)年11月、第2回(本校のみ)武田常夫、本校1年国語、わたしのたんじょう日、教科書。金井栄子、本校3年国語、山の向こう、教科書。海東照子、本校5年社会、地震と火山の国、教科書。

1957(昭和32)年12月、第3回、赤坂里子、分校1年国語、お月さまときたかぜ、教科書。武田常夫、分校3年国語、山の子ども、教科書。船戸咲子、分校5年国語、塩田の父、教科書。滝沢友次、本校2年国語、るすばん、教科書。金井栄子、本校4年国語、鉄の馬、教科書。海東照子、本校6年社会、中郷、教科書。

1958(昭和33)年12月、第4回、久保田(旧姓杉本)和子、分校1年国語、えにかいたとら、教科書。武田常夫、分校4年国語、鉄の馬、教科書。船戸咲子、分校6年国語、レオナルドの最後の晩餐、教科書。川嶋(旧姓児島)環、本校2年理科、むしめがね、教科書。金井栄子、本校4年算数、体積、教科書。金子緯一郎、本校6年国語、レオナルドの最後の晩餐、教科書。

1959(昭和34)年12月、第5回、久保田(旧姓杉本)和子、分校1年国語、えにかいたとら、教科書。赤坂里子、分校3年国語、山の向こう、教科書。船戸咲子、分校4年算数、お金集め、教科書。武田常夫、分校6年国語、ペニシリンを作り

上げた人々、教科書。金井栄子、本校4年算数、お金集め、教科書。滝沢友次、本校6年算数、真分数で仮分数の掛算、教科書。

1960（昭和35）年12月、第6回、赤坂里子、分校4年国語、天下一の馬、教科書。船戸咲子、分校5年国語、塩田の父、教科書。武田常夫、分校6年国語、ペニシリンを作り上げた人々、教科書。川嶋（旧姓児島）環、本校1年理科、じしゃくあそび、教科書。金子緯一郎、本校2年国語、月夜のバス、教科書。金井栄子、本校5年算数、形と体積、教科書。

1961（昭和36）年12月、第7回、船戸咲子、分校4年国語、うた時計、文学。赤坂里子、分校5年国語、やかれたさかな、文学。武田常夫、分校6年国語、大きなしらかば、教科書。川嶋（旧姓児島）環、本校2年理科、あま水、教科書。金子緯一郎、本校3年国語、耳のちりょう、教科書。金井栄子、本校5年算数、平行四辺形の面積、教科書。滝沢友次、本校6年国語、ペニシリンを作り上げた人々、教科書。

1962（昭和37）年12月、第8回、久保田（旧姓杉本）和子、分校1年国語、すずのへいたい、文学。武田常夫、分校5年国語、おしになった娘、文学。赤坂里子、分校6年国語、黒いピロート服の女性、文学。川嶋（旧姓児島）環、本校3年理科、蒸気、教科書。金子緯一郎、本校4年国語、天下一の馬、教科書。船戸咲子、本校5年国語、走れメロス、文学。

1963（昭和38）年1月、第3回小、久保田（旧姓杉本）和子、分校1年国語、ばかな子ネズミ、文学。大沢清剛、分校2年国語、すずのへいたい、文学。岡芹忍、分校3・4年国語、はる、文学。武田常夫、分校5年国語、たわしのみそ汁、文学。赤坂里子、分校6年国語、黒いピロート服の女性、文学。小保方晃子、本校1年国語、おじいさんのえほん おばあさんのえほん、文学。金井栄子、本校2年算数、400-134（の筆算）、教科書。川嶋（旧姓児島）環、本校3年理科、メチールアルコールの蒸気、教科書。金子緯一郎、本校

4年国語、センキチじいさん、文学。船戸咲子、本校5年国語、おしになった娘、文学。滝沢友次、本校6年国語、三好達治、文学。

ここでわかるように1961年（第6回）まではすべてが教科用図書の教材によって研究授業が行われた。教科用図書以外の教材が公開研の研究授業にあらわれるのは1962年（第7回）の「うた時計」と「やかれたさかな」である。「やかれたさかな」は『島小の授業』（前出）において船戸咲子によって実践記録が書かれる。こうした事実から見て島小においては文学教材の発掘や開発を熱心に行っていたものの、その取り組みには実にさまざまな試行錯誤のあとが見られる。

島小においては歌唱教材、身体表現教材なども独自に作成された。既成の楽曲等も収集された<sup>\*15</sup>。公開研においても児童の行進、合唱の他、教職員の合唱、演劇などが披露された<sup>\*16</sup>。したがって教材を新たにつくり出したり、見つけ出したりすることは島小においてはしばしば行われていたのであるが、しかし、それはあくまでも子どもの力が高まるのにしたがってその力をさらに高めるために必要となる教材を探す必要が出てきたからである<sup>\*17</sup>。1962（昭和37）年12月に刊行された斎藤編『島小の授業』（麥書房）のなかで斎藤は島小で使用する教材について次のように言う。

私たちはこの十一年間、そのような作業（島小の授業が教師個人の個性とともに、学校としての共同での検討や外部からの専門家の力を借りながらの研究の上に成り立っていた教材解釈、授業案づくり、授業実践—引用者）をしつづけてきた。そしてその結果、教科教材の『自主編成』というようなことも、その出発が、ようやくここに小さくはじまったのだと考えている。『自主編成』の問題を口で言い、机上で考えるのは簡単である。しかし、島小の場合は、教師集団全体の力で実践しつづけて、つまずいたり、壁につきあたったりしながら、絶えず授業という仕事のなかで、教材選択の問題、教材解釈の問題、授業



展開の問題を検討し、否定したり否定されたり、実現したりしながら今日まできた。そしてその結果、『自主編成』ということがどんなに大へんなことであるか、授業の質にかけた上で、しかも長い時間かけてやらなければならないものだからということも身にしみて感じてきた<sup>\*18</sup>

鳥小の公開研において取り組まれた研究授業の全体を総覧する限りにおいて、このことはかなり確かなことであるといえる。斎藤による鳥小の11年間に及ぶ学校づくりの中で、最初の9年間は教科用図書の教材のみを使用している。最後の2年間でようやく教科用図書以外の教材を使用するに至る。このことから、ここで斎藤が言うことができる。このことから、ここで斎藤が言うことができる。かなりの真実味を帯びて迫ってくる。

後日のことになるが、七百中の学校づくりにおいて斎藤が直接指導を行った際に教材の準備ができていなかったことがあった。その際斎藤は校歌なら歌えるでしょうといい、校歌の指導を行ったというのである<sup>\*19</sup>。歌唱指導であれば、鳥小において創作した作品がある。それ以外にも教科用図書に掲載される歌曲などさまざまにある。それを教材とすることはたやすいことである。しかしながら、そうした準備をしていなかった場合においても斎藤はとっさに校歌を教材にし、歌唱指導をしたというのである。こうしたことから見ても斎藤がその教材の内容や価値よりも子どもと教師との対話を重視したことは明らかである。子どもとの対話のためにはどんなものでも教材にしてしまうという対応力を斎藤自身が備えていたということである。

鳥小における公開研の全体を総覧すると、まずは教科用図書を使用しながら子どもと教師との対話を深めていった。その教材では子どもの力が引き出せないという極限のところまで教科用図書の教材を研究し尽くしていく。そういう姿がこの記録から浮かび上がる。

### 3. 学校づくりの苦悩と喜び

#### 1) 公開研を支える基盤づくり

鳥小の学校づくりがはじまった当初(1952年)は通俗的であり、一般的であると思われる授業や表現活動を斎藤はまずは認めた。しかしながら、それだけでは子どもの力を引き出したり、新たに作り出したりすることができない。その中で新しい授業や表現活動を産み出そうと努力している<sup>\*20</sup>。こうした取り組みが公開研で子どもの姿として示される。同時に教師や学級が選ばれた。その上で研究授業が行われたという事実が特筆される。

これまで見てきたように武田常夫を筆頭とし、選ばれた教師たちが鳥小では公開研の研究授業者となった。ここにはその教師たちの実力も確かに存在した。しかしながら、それ以上に授業の研究材料として確かなものを得たいという鳥小の強い願いがそこに反映していた。研究するに値する内容や方法を提起できるだけの学級や教師が鳥小における公開研の研究授業者や提供学級として選ばれていたということである。

#### 2) 教師の資質や能力の差を認めること

一般的には教師の資質や力量に差があるということをも認めないことが多い。公平、平等という観点から、どの学級でも同じような学習条件が整っていると考えるのが一般的である。そのために校内研修などの研究が前進しないという例がある。ややもすれば新任の教師に研究授業者を任せる。20年以上も学習指導案を書いたことがないという現役の教師に出会ったことがある。こうしたことは極端な事例かもしれないが、一般的に言えば教師たちは子どもに対して公平、平等であると考えられている。その資質や力量にも差がないということをも前提とする。そのあまり実践的な研究活動が不活発になる。そういう実情をしばしば目にする。

もちろんそこには地域や保護者に対する公教育



としての責任がある。どの学校でも、どの学級でも、どの教師でも一定程度の教育が受けられるということを保障する。それが公教育としての責任であり、役割である。それは確かに重要なことではあるが、しかし、現実の教師には資質や能力の違いがある。島小では、そのことを前提として学校づくりを展開した。力の差を認めつつ、学校として力をつけていこうとした。その仕事のなかで子どもたちの可能性や潜在的な能力を引き出した、ないものまでをも創り上げるということを目指した<sup>\*21</sup>。

当然のことながら島小のような学校づくりを実践するためには相当な覚悟が必要である<sup>\*22</sup>。まずは、教師たちの集団をまとめ上げることが必要である。お互いに胸襟を開いて学び合う関係を構築しなければならない<sup>\*23</sup>。島小での公開研をただ単に形だけを真似れば子どもが育つということはないのである。

島小においては地域を解放し<sup>\*24</sup>、教師を解放し、子どもを解放するという仕事に当初の数年間をあてている<sup>\*25</sup>。こうした苦労や辛抱、我慢の上に後の公開研が展開する。その中には実に多様な取り組みがなされた。

とりわけ研究授業において、国語を中心とした教科用図書を教材とする実践が展開した。算数、理科、社会などの教科目にわたって研究授業が展開した。この事実は重要である。今後はその研究授業の内容や方法に光をあてる必要がある。他日を期したい。

## 【附記】

本研究では、科学研究費補助金(21K02246)の助成を受けた。また、日本教育方法学会第57回大会(宮城教育大学)での口頭報告、野間教育研究所「教育と公共」部会2021年度研究会での口頭報告をもとにして、その内容を大幅に書きかえた。

- \* 1 横須賀薫『斎藤喜博 人と仕事』国土社、1997年、114-129頁など。
- \* 2 横須賀薫「解説」、横山芳春『日本語を学ぶ中国の若者たち—詩の授業による心の交流の記録』ボーダーインク、2021年、306頁。
- \* 3 狩野、島小における教職員の力量形成、鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要、第10巻、47-62頁、2000年。
- \* 4 麥書房、1966年、後に『島小研究報告』第6巻、1995年、大空社に所収。
- \* 5 『島小研究報告』第7巻、1996年にその一部が所収された。
- \* 6 2021年7月7日インタビュー。
- \* 7 狩野、島小における教職員の力量形成(前出)。
- \* 8 赤坂里子著、斎藤喜博解説『島小での芽を吹く子ども—六年間・持ち上がりの記録』80-90頁、1967年、明治図書。
- \* 9 狩野、島小における教職員の力量形成(前出)
- \* 10 川嶋(旧姓児島)環談。2021年7月7日。於：東京都杉並区。
- \* 11 『島小研究報告』にも、この雑誌が転載され、掲載されている。
- \* 12 狩野、島小の教育実践—学校行事、鹿児島大学教育学部研究紀要・教育科学編、第55巻、131-158頁、2003年
- \* 13 「川と人のつながり」社会・3、4年岡芹忍、85頁、「うちのしごと」社会・1年小保方晃子、181頁が収められている。
- \* 14 『島小研究報告』第3巻、大空社、1995年所収として、「針を持たない家庭科教師」海東照子著(島小学校1955年刊)第13集。『島小研究報告』第4巻、大空社、1995年所収として、第16集「島村の子ども会」海東照子著〔島小学校1958(昭和33)年刊〕第18集「どどめジャムの子の学級づくり」海東照子著〔島小学校1958(昭和33)年刊〕がある。

- \*15 狩野、島小における学校行事の展開、鹿児島大学教育学部研究紀要. 教育科学編、第56巻、137-163頁、2004年。
- \*16 狩野、授業づくりを核とする学校づくり運動に関する総合的研究—島小における表現活動の発生と展開—、十文字学園女子大学人間生活学部紀要第7巻、33-46頁、2009年。
- \*17 狩野、島小の教育実践—授業づくり、鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要、第12巻、39-59頁、2002年。
- \*18 8頁。
- \*19 七百中（青森・六戸町）は、1978年から3年間にわたり学校づくりを展開し、斎藤喜博が直接指導した学校（公開研は2回実施）である。宮城教育大学の教授であった横須賀薫が、斎藤の指導場面をすぐそばで見ているということ、その際、まったく自然に校歌の指導を展開したということである。1994年頃、宮城教育大学で筆者が聞きとった内容である。
- \*20 狩野、島小の教育実践—初期における学級づくりを中心に、鹿児島大学教育学部研究紀要. 教育科学編、第53巻、235-254頁、2001年。
- \*21 狩野、島小の教育実践—横口（介入）授業の展開とその意味、鹿児島大学教育学部研究紀要. 教育科学編、第57巻、133-149頁、2005年。
- \*22 狩野、伊江村立西小学校の教育実践、鹿児島大学教育学部研究紀要. 教育科学編、第52巻、193-210頁、2000年。
- \*23 狩野、島小における教職員の力量形成、鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要、鹿児島大学教育学部附属教育実践総合センター編、第10巻、47-62頁、2000年。
- \*24 狩野、島小の教育実践—地域と学校、教育方法学研究、日本教育方法学会紀要、「教育方法学研究」編集委員会編、第28巻、11-21頁、2002年。
- \*25 狩野、島小における「解放」と教育、鹿児島大学教育学部研究紀要. 教育科学編、第51巻、217-236頁、1999年。